

2026 年 9 月 20 日

横浜読書会 konkon 第 2 回課題本読書会
現役学芸員とゆる〜く語る『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』読書会

1. ナビゲーター：しほ

読書するただの 30 代一般人。横浜に住み、東京で学芸員の仕事を
している。専門は日本美術史、特に浮世絵。小説とエッセイ、とりわけ食に
関する本が好き。その他、美術館、歌舞伎、宝塚、戦後の日本映画など、芸術に
関することが好き。各種 SNS→@shihobook1992



X



note

2. 著者について

三宅 香帆(みやけ・かほ)

文芸評論家。1994 年生まれ。高知県出身。京都大学大学院人間・環境学研究科博士前期課程修了
(専門は萬葉集)。著作に『(読んだふりしたけど)ぶっちゃけよく分からん、あの名作小説を面白く読む方
法』、『文芸オタクの私が教える バズる文章教室』、『人生を狂わす名著 50』など多数。

YouTube には「三宅書店【本を読むモチベを上げるチャンネル】」がある。また、YouTube チャンネル
「Page Turners」では MC の竹下隆一郎氏とともに、その月に読んだ本を持ち寄り、トークを繰り広げ
る。

3. 『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』概要

本書は、仕事等に追われる中で、趣味や読書の時間を持つことが難しくなっている現実に焦点を当て
る。明治時代から現代に至るまでの労働と読書のあり方を紐解きつつ、「全身全霊で働く社会」から「半身
で働く社会」への転換を提唱。

明治～戦後、立身出世に必要なのは、教養や勉強といった社会に関する知識で、読書をすることはエリ
ートとしての教養。一方、現代では自分に必要な情報を得て、不必要な情報はノイズとして除去される。偶
然性の高い読書は、ノイズが多く、仕事に追われる現代社会では遠ざけられる傾向にある。1980 年代の
長時間労働の中でも本が読めていたのは、それが労働や社会的地位上昇の役に立つ「知識」を得る媒体
だったため。

著者は、全身全霊で仕事に取り組む社会から、自分に関係のないノイズの文脈を取り入れられる余裕を
持つため「半身」で働くことを主張する。

4. 参加者の皆様への問い(2 周目のテーマ)

今後、読書をするためにどのような工夫をしたいと思いますか？

また、すでにしている工夫があれば教えてください。

補足資料：各章(第一章～第九章)のメモ ※必要に応じてご覧ください。

第一章 労働を煽る自己啓発書の発生 ——明治時代

「労働」という言葉が生まれた時代。

図書館が登場→しかし利用者の大半はエリート学生などインテリ層の男性。

立身出世を煽るミリオンセラーが登場＝『西国立志編』→自助努力の精神。

『西国立志編』で「修養」(≡勤勉・自己努力)という言葉がはじめて登場。本書は立身出世を目指す男性たちのバイブルだった。

しかし、このような「自己啓発書」をめぐる日本の階級格差は、明治から令和に至るまで続いている。

第二章 「教養」が隔てたサラリーマン階級と労働者階級 ——大正時代

大正時代、読書人口が増加した。識字率を下げない手段として読書がすすめられた。

しかし、ベストセラーは社会不安を表す暗いものが多かった。

明治時代にエリート間で広まった「修養」は、大正時代には労働者階級に根付いていた。読書は「品格」を上げるための行為として捉えられていた。

エリートには知識を重要視する「教養」が広まった。

「教養」＝エリート 「修養」＝ノン・エリート

「教養」は常に「修養」＝「仕事のための自己啓発」との距離を変え続けている。

第三章 戦前サラリーマンはなぜ「円本」を買ったのか？ ——昭和戦前・戦中

大正12年、関東大震災が発生。大正末期は出版界もどん底に→「円本」が出版界に革命を起こす。

「円本」とは、1冊1円(2,000円程度)の全集。全巻一括予約制で月額払い。

昭和初期、教育を受け学歴があることは、大正時代から続く社会的階層が高いことの象徴

→ずらりと並べられる円本全集を購入することは、労働者階級との違いを誇示することにつながった。

第四章 「ビジネスマン」に読まれたベストセラー ——1950～60年代

戦後労働者にも「教養」が広がる。「教養」は労働者がエリートに近づこうとする階級上昇運動だった。

1960年代は日本史上最も労働時間が長かった。この時代は高度経済成長期。

そんな忙しいサラリーマンに本を買ってもらうには？→身近で役に立つ新書を登場させる。

→これは「本」をインテリ階級から解放する行為だった。働く人が増えたから、働く人向けの本が一番売れた。

第五章 司馬遼太郎の文庫本を読むサラリーマン ——1970 年代

1970 年代ブームとなった司馬遼太郎は、ビジネスマンに偏って読まれていた。

→歴史という教養を学ぶことで優れた存在にのし上がる。

70 年代、現代に続く「日本企業」のフレームができた。60 年代は「会社に入りさえすれば」という夢があったが、70 年代、高度経済成長期は遠いものになった。

司馬遼太郎の『坂の上の雲』という明治の立身出世の物語は、高度経済成長期へのノスタルジーだったのでは？

第六章 女たちのカルチャーセンターとミリオンセラー ——1980 年代

70 年代以降、「若者の読書離れ」という言葉が定着。しかし 80 年代出版業界の売上はピークを迎えつつあった。一方で長時間労働のサラリーマンも増加。

80 年代は雑誌が出版バブルを支える。教養主義的側面はなく、すぐに使える知識を伝えるものだった。

→サラリーマンの間で学歴よりも処世術のほうが大切という価値観が広まった。

→80 年代のベストセラー文芸は多くが一人称視点。社会ではなく「僕」「私」の物語が求められた。

80 年代、企業のカルチャーセンターは黄金期。8 割が女性。

→戦後、学歴コンプを埋めるために「教養」を求めた。男性たちと同様の行動が 80 年代の女性たちにも開かれた。

第七章 行動と経済の時代への転換点 ——1990 年代

90 年代後半、〈行動〉の時代になる。自分に対して何か行動を起こすことで好転させる。

→自己啓発書のロジック これがベストセラーとなった時代。

『西国立志編』や司馬小説は「心構え」「知識」など内面を表す。しかし、90 年代の自己啓発は読者がとるべき行動を明示した。なぜ？

90 年代バブル崩壊、企業の採用人数減。自分のキャリアが自己責任となる。

仕組みを知って行動し、コントロールできるものをコントロールする。

働いているといかに市場に適合できているかを求められる。適合するにはそれに必要ないノイズをなくさなければいけない。

ノイズを除去する自己啓発書に対し、文芸書や人文書はノイズだった。

第八章 仕事がアイデンティティになる社会 ——2000 年代

自己実現＝「仕事で」というニュアンスがつかまとう→2000 年代以降、「仕事で自己実現すること」を称賛してきたため。

村上龍『13 歳のハローワーク』がベストセラーとなる。本書は子どもの「好き」を活かせるような職業を紹介。

1990 年からの新自由主義改革のもとではじまった教育で、教養ではなく「労働」で自己実現を図るべきと

いう思想が広まった。

「読書離れ」が始まったのが 2000 年代→情報化にともなう経済と金融の自由化が進んだため。

本は読めなくてもインターネットはできるのはなぜ？→教養の本と比較して、インターネットはノイズ(他者や歴史や社会の文脈)のないほしい情報を私たちに与えてくれる。自分の階級の低さに苦しめられていた人々のニーズに応えていた。

第九章 読書は人生の「ノイズ」なのか？ ——2010 年代

コントロール可能なものに集中して行動量を増やすことが、人生の勝算を上げるコツ？

1990～2000 年代にかけて新自由主義が広まる＝自己決定・自己責任論。

副業やフリーランスといった働き方がもてはやされるようになる。「個」として市場価値のある人間になるべきというメッセージが日本社会に発信された。

2010 年代、SNS が生活に普及。読書を「娯楽」ではなく処理すべき「情報」として捉えている人が多くなった。

「ファスト教養」＝〈ノイズを除去した情報〉の台頭。しかし、ノイズを完全に除去した情報だけで生きるなんてできるのか？

大切なのは、他者の文脈をシャットアウトしないこと。仕事以外の文脈を思い出すこと。そのノイズを思い出し、受け入れること。これが働きながら本を読む一歩。

本が読めない状況＝新しい文脈をつくる余裕がない。自分に関係のあるものばかりを求めてしまう。

→半分で働いていないからこうなる。半分で働いて余裕を持とう。